

新刊
紹介

上野直蔵著
『人生の詩』

(山口書店 B 6 版 一七〇頁)
一八〇〇円

十数年もまえのことだが、上野先生の『人生 友情 学問』(教文館)というご本を、興味ふかく拝読したことがある。同志社大学長として、卒業式などで語られた祝辞のようなものが中心であったと記憶している。

祝辞のようなもの、というのは失礼な言い方かもしれないのだが、そんな言い方しきれないのは、祝辞であろうとは思いますが、内容はいつこうにそれらしくないから。古今東西の文学や文人をひきあいに出版されて語られるそれは、文学談に接する感

For some in ancient books delight;
Others prefer what moderns write
Now I should be extremely loth
Not to be thought expert in both.

が、むしろつよいものであった。

「卒業式というと、わたくしは校長先生の長い長い訓話を思い出す。だいたい内容は型がきまっていて、(中略)長い年月毎年三月になると、こんなきまりコトバをきかされもし、また、言いもしてきた。」

このたび上梓された『人生の詩』に収められている文章の一節である。「言いもしてきた」と書かれているのは、謙遜か恥じらいであろう。先生は型にはまるまいとされ、「きまりコトバ」を拒絶してこられたのだ。

巻頭の「親不孝」が、そのことを雄弁に語っている。伊藤整の『若い詩人の肖像』もそうだが、世間態のよいいわゆる親孝行を型どり果たす途ではなく、学問がしたければかりに、父親から「利己主義者」と叱りつけられるような生き方を選びとられた上野先生は、その選択においてすでに、型にはまることをいさぎよしとされなかったのである。

この文章は、先生の『還暦記念論文集』から転載されたものだ。「干しニシンのように小さく枯れ細った母親を見るのが恐ろ

し」くて、「できるだけだけ母親には会わないようにしていた」と、老いた母に対する子の情を有り体に語られた文章を、そうした論文集に掲げられたこともまた、「きまりコトバ」を語ることの拒絶であろう。

このご本には、幾篇か弔辞が収められているが、それらはいずれも型どりのものではない。故人の風貌と著者のおもいがこまやかに記されていて、ひとしお感動をそそる。型よりも人情の自然を重んじられることが、おそらくその大きな要因である。飾らず気取らず、折おりのおもいに即して書かれた達意の文章からなる『人生の詩』は、厳めしい同志社総長が秘めておられる人間味を、いきいきと伝える好著である。

河野仁昭 (社史史料編集所事務主任)

上野直蔵著

『同志社百年—その前後』

(山口書店 B 6 判 二〇〇頁)
一五〇〇円

私が上野先生の著書の紹介など思いもよらないことである。が『同志社百年—その前後』が出版されたのが去る三月十日、購

読したのが十五日、最も早く読ませて頂いた者の一人ではある。私は中学も大学も同志社に学び同志社香里中高に二十年、定年に至るまで働かして頂いた者であるから創立者新島襄先生のこと、同志社の苦難に満ちた歴史、ことに私学の独自性や戦後の混乱、そして将来への展望など、及ばずながら関心を持たないわけにはいかない。中学生の頃、総長は海老名弾正、戦後神学部部門を叩いた時は湯浅八郎、同志社香里に就職した時は大塚節治、在職中は住谷悦治、退職の時は上野直蔵、何れも同志社教育を代表するに相応しい先生方であり学問的にも教育的にもすぐれた業績を残された方々ばかりである。只残念なことは、創立者の立学の精神を正當に承継して来られた筈の歴代の総長方の公的な立場での教学上の意志表明やその周辺を物語るような文献が我々の手に入り易い形では殆ど残されていない。『同志社百年―その前後』は、その点で我々の期待に答える内容を持つものである。最初の四分の一は、創立百年記念式典から百五年式典まで連続五カ年の式辞が年ごとに異なった角度から問題をとらえ豊

富な資料と話題を縦横に駆使して同志社とその教育理念を説き去り説き来って読む者をして倦ませない。次の四分の一は大学入學式での式辞をはじめ「同志社時報」等に発表された数篇の随想等が集められ先生の長い人生遍歴と学究生活の間から滲み出た人間性に対する深い洞察が若い学徒達への愛情に満ちた辞によって語られている。この書の二分の一を占める後半は第一に最近の講演「二十一世紀の同志社を語る」で、短いが警世の文字。続く「学問―「実学」と「虚学」」「非合理と不合理」「教育の国際化」は最も本格的な先生の学問論であり、人生論且つ人間学の展開であろう。新島襄が茲にその教学の基礎をおいたキリスト教を、何のこだわりもなく謙虚に人格化されたことに感銘する。最後の「新しき大学像」は思い切った大学改革案の具体的提示である。広い視野と先見的洞察と教育愛から生まれた独創的な構想である。しかし先生の最も語りたかったことは「結びとして」の一文であろう。兎もあれ同志社創立百年記念の日を総長の重責と共に迎えられた上野直蔵先生が、かの「見えざる

御手に」導かれて、その職責を全うせられることを祈ってやまない。

大橋寛政（同志社校友会専務理事）

小野修善

『市民社会の平和と安全』

（昭和堂 B6判 二九四頁）
一八〇〇円

平和と安全保障に関する論議といえ、人は往々にして、ある特定の政治的立場に立ったイデオロギー的発言やプロパガンダを想像しがちであるが、本書はそういった種類の本とは全く異なる著者の専攻するイギリス政治思想の学殖に支えられたユニークな警世の書である。全九篇と英文の付録一篇から成る。

ラッセルの平和論を扱った章をはじめ、随所に政治や国家、人間の自由に関する先哲の思想の解釈がちりばめられており、その意味では本書は優に一冊の思想史の労作としての性格をもあわせもつ。

著者の現代日本の防衛問題に対する提言はこうである。すなわち、現状の「軽軍備」―といっても著者が指摘するように、自衛隊は今や世界第八位の軍事力に成長し

ているが、一を維持しながら、日米安保条約を廃棄した非同盟の日本を実現することによって、国是としての憲法第九条をあくまでも守らなければならないと説く。いわゆる武装中立論のすすめである。この「軽軍備」・非同盟の選択は、また、日本が核の攻撃をうけずに生き延びるためのもっとも現実的な方策であり、ソ連の対日「脅威」感の解消にも役立つ策であることが強調されている。しかも実は、次の論点が著者のユニークな指摘なのであるが、中立の外交政策を採ることによって、「自民党政府の軍隊」と化している現在の自衛隊を真の国民の軍隊に変えることができるということ、つまり、「民衆の衆望を担って民衆が尊敬の念を抱きうる軍隊」を創出するために、祖国を自らの手で守りぬくという気概に満ちた青少年を育成する必要が力説されている。まさに文武両道を目指した平和論というべきか。冒頭にユニークな書という形容を付したのも実はこの点に係りをもつ。すべからず青年は武器の扱いを覚え、武道の心得をもち、ふしだらで怠惰な生活態度をすてて勤勉で規律正しく勇猛心をも

つべしとするその青年論は、かつて、江田島の海軍兵学校にあげられた少年期の著者の熱誠のあるデフォルメといえなくもない（若き愛国の勇士たちに捧げられた美しい一篇の鎮魂詩たる英文「江田島」を参照されたい）。私は、本書が提起する最も重要な問題の一つが防衛と教育の論議にあると考えるが、より詳細な論旨の発表を是非、著者に期待したい。

さて、著者の「軽軍備」・非同盟の国防思想を支える国際認識の構造は何であろうか。著者曰く、現在の米ソを中心とした勢力均衡策にもとつた集団安全保障体制は、核兵器による恐怖の均衡となつて世界を慢性的な危機の状態に追い込んでいる。それゆえ、人類は、今こそ偏狭なナショナリズムを脱脚し理性的な国際協力の確立に向かうべきである。そのためには、国連を中心とした積極的な平和外交の展開によつて、イデオロギーの違いを超えて人権が擁護される自由で平和な社会を作る必要があると。キナ臭い国防論議が盛んな昨今、それは、クールな情熱に支えられた好個の「平和の政治学」であるといえよう。

西田 毅（大学法学部教授）

別所秀子著 句集

続々々『やわらぎ』

（自家版、限定二〇〇部）

本句集は世の俳人が己が作品を江湖にその評価を問うという類のものではない。著者がその時、折々に自然の懐に遊ばれた吐息、いうなれば肩、膨張らず、造化の美しさを平明に詠いあげた、いわば心の日記といった作品が大半するものである。

所で本集は第四番目のものであつて、第一集は昭和四十九年に三十一年間勤務された母校を停年退職され、名誉教授となられ且つ句作五年目にあたるのをけじめとされたものであり、第二集は同五十一年が神に召されたご主人の十周年にあつたものであり、第三集の同五十三年は句作十年目を区切りとし、今回の第四集は「神様の見えるお導き」により同五十五年十一月に目出度く喜寿を迎えられたのを記念されたものなのである。

翻つて句集名は総て「やわらぎ」となつておるが、それはその昔同志社女学校に入

学されて以来の信仰の道の中に「神様は私共になくてはならぬものを必ず与えて下さる」という確信に伴い、俳句に見られる「やわらぎ」ごとき境地が私には必要ではなからうかとの謙遜的自覚に由来されたものであって、科学者として人生の大半を教壇に過ぎられた著者の人となりの中に、神の啓示とはいいい乍ら、心の幅をそこに見出すのである。

集中より作品を適宜取り上げてみよう。

行く春やふと振りかえる己が影

讚美歌に心たらいぬ春の昼

肩掛や山阪こゆる一人の身

著者の日頃の生活、心境が表出されている。

御所道の朝のしじまや秋の声

清滝の木空の深し初嵐

京都人ならではの適切にして深き洞察。

初旅や夜空に富士の光放つ

暖かや松にかかりし日の重し

夕立や一望の蓮煙はく

自然の客観写生は俳句文芸の本筋であるが、ここには堂々と、ゆるぎなき把握が行はれている。と思えば

引鶴の大いなる翳しるしつ

と、停年退職される越智元学長の榮譽をたたえつつ、惜別の情を述べて適切と思はれるし、その他折にふれ教え子に与えたる句、旅中吟の数々と、幅ひろく詠はれているが、冒頭に述べた如く、著者の日頃の心に響いた日記の一連でもあろう。それだけに学園にかかわる人々には親近感があることと思はれる。

佐藤一九八（いくよ会主宰）

湯浅八郎著

『若者に幻を』

(B6判・国際基督教大学
同窓会 三、〇〇〇円)

著者、湯浅八郎先生は、昭和十年代および二十年代の同志社学園史を特色づける総長であった。つまり一九三五年（昭和十年）四月より一九三七年十二月までの第十代総長、戦後の一九四七年四月より一九五〇年六月までの第十二代総長を務められた。

そして九十一歳で永眠された本年八月まで、その創設にかかわった国際基督教大学の理事長としてなお奉仕をつづけられた。

この紹介の拙文も今や謹んで在天の先生の霊に思いをはせたものとなった。

本書は、著者が自分の「人生メモ」（四〇三頁）とみているように、戦前からおもに戦後にかけて発表、未発表のものも含めて七十三篇を七章に分けて集録している。

まず、今日、もっとも身近で深刻な平和国家の在り方について、著者によれば「現行の日本（国）憲法は、この非武装の原理に即するがゆえに、世界に冠絶する」（一八七頁、カッコ内筆者）と明確に打ち出していることに注目したい。一般に、湯浅を評する人々のうちでよく聞かれることは、湯浅は創造神を仰ぐ信仰を純粹に現代の高度化された科学技術やイデオロギーの中に採用するので、今の非人間化の状況を徹底して科学的に究明できない、したがって国家権力の策術や構造に批判や闘争もしない方の自由人だとみられた。

本書により人はこの点は、かなりに修正させられるであろう。

著者は原子力革命という歴史的必然を素直に受けとろうとする。そこには当然、不

安と期待は交差するが、人類の未来はそれによって「全面的にまた根本的に改革」(一〇〇頁)されることを容認しなければならぬとする。これを見通すのが永遠性に着眼できるキリスト者ではないか、と訴えてくれる。

その合理主義には地球世界の生成発達に「現代人の心得」をもつて接すること。つまりアポロ計画と空間殖民問題、海中部市のほかレーザー武器などの地球粉砕の可能性も知れ、という。(一二二頁)

著者によればこの宇宙世界は物象界の進化とかつ宗教界の「真化」によって発達する(一一四頁)とみる。

そしてこの生成発達を導く神のみ手を信じる湯浅の確信は、決して書齋や研究室の中から出たものでなく、朝市に並ぶ民芸品などの民族にも共通して美しい手製の生活用品の美と普遍性や永遠性——神のわざを認めるところによっている。それゆえに湯浅の国際主義とこだわらない自由な合理主義が特筆されるのである。心の窓を現実直視から永遠の美にむけつつける「青年」に送る湯浅の友情ある好書である。

中 皓著

『与謝野鉄幹』

桜楓社
(二七〇頁、一八〇〇円) B6版

武 邦保 (女子大学教授)

明治の若者の血を湧かせた文学雑誌「明星」の名を知り、その花形であった与謝野晶子の人気を知る者はあっても、その夫与謝野鉄幹の業績を言う者のほとんどないのはどうしたことであろう。晶子の令名あまりに高く喧伝せられたために鉄幹は蔭の人となってしまったのかも知れないが、明治三十二年に東京新詩社を興し、「自我の詩」を主唱するとともに翌年から「明星」を刊行経営し、多くのすぐれた詩人歌人を輩出せしめた鉄幹の功労と、その独特の歌業を忘れ去ってしまったてよといふことはあるまい。本書の著者は同志社女子大学教授として一般教育に携るかたわら、多年にわたる近代文学特に与謝野鉄幹の履歴についてくまなく資料を渉猟蒐集しつつ、その文学的活動をつぶさに調査して来た篤学の士である。「鉄幹与謝野寛遊いてから早くも四十五年の歲月が経過した。生涯から数える

と、百七年になる。明治、大正、昭和の三代にわたる輝かしい文業にかかわらず、寛について触れた文章の殆んどは片々たるものに過ぎない。しかも、その数も多くなはな。そして、寛の生きた時代の折々の評判も、ともすれば、悪声の方が声高で、俗耳に入りやすいところがあった」と著者は言う。前半の「作家研究編」には「生い立ち」「少年時代(漢詩とのめぐりあい)」「少年期から青年期へ(『鳳雛』発行まで)」「歌人的自己形成(『東西南北』『天地玄黄』まで)」「歌風の確立(『明星』発行前後)」「歌風の展開」「大正から昭和へ」「終焉」と、その実生涯を追求し、新資料を活用して説得力がある。後半の「秀歌鑑賞編」には代表歌百首について、一頁ごとに一首ずつ丁寧綿密に鑑賞してあり、従来よく知られている。

野に生ふる草にも物を言はせばや涙も
あらむ歌もあるらむ

韓山かんざんに秋かせ立つや太刀などでわれ思
ふこと無きにしもあらず
などのほか

かたはらの瓦の硯あぶらじもの云ひぬ主人あらしす

こし疲れたるかど

疵ありて蝦蟇のすがたをいつはらずわれ珍重す流俗の歌

など、皮肉自嘲の味のある鉄幹らしい歌を鑑賞してはおもしろい。本書は「短歌シリーズ・人と作品」中の一冊としての紙面の制約があり、近い将来に著者による「与謝野鉄幹研究」の出版が期待される。

田中 順二（奈良大学教授）

人文科学研究所編

『共同研究・日本の家』

（国書刊行会・A5判
四八三頁・八、〇〇〇円）

日本の「いえ」が古今東西の家族のなかでも特異な地位を占めることを知るひとは多い。本書のまえがきにもあるように、「わが国の近現代の家族の特質を社会諸科学から解明」することが試みられるのは、それだけいろいろな科学の立場から「いえ」が研究に値すると思われているからである。せっかく過去の天才が科学というそのものずばりの名称を発明した日本で、学際的ななどという曖昧模糊たる言葉しか使えないのは心ぐるしいことではあるが、とにかく

く、いろいろな分科にわかれてしまったそれぞれの学問の専門家が「いえ」という共通の研究対象にむかって協力した成果は、「日本」に興味をもつほどのあらゆる読者の想像力を刺激するものとなった。

筆者自身についていえば、自分の専門領域から遠い方面からの研究が特に興味深かった。紙数の制限から引用した参照箇所などみなはぶかせていただが、たとえば「家」の意識は、観念的なものとしては、ある程度（ほぼ一町歩）以上の家産を前提としている……というような即物的な説明がつよく印象にのこるのである。維新までの「いえ」が一種の corporation であったと断言したのが名だたる御用学者であったり、現在の政治学関係者が「法人」という名称をもちいることも、後述することと関連して興味ぶかかった。

明治政府の指導者が多く下士軽輩のたぐいであつたといえ、禄を喰んでいたものの子孫であつたことから、士分のものの考え方と、右の家産を持った農民層の「いえ」思想をないまぜて、当時の国民思想の礎に据えようとした計略は図にあつたようである。

第二次世界大戦までの日本人大衆が一般に、いいかえれば無産階級の大部分までが、「いえ」思想の信奉者となつていたことが今日、経済的にも恵まれ、ひろい住居も持ち得るハワイニ・三世の考え方のなかによく反映している。

この共同研究には興味ふかいモノグラフも多数ふくまれているのだが、残念ながらいまその点にふれるいとまがない。

ここでは最後に、今後の「いえ」の研究の一つの注文をつけておきたいと思う。

それは、多くの学者が「いえ」を法人になぞらえていることに關係するが、その場合の法人という名称は西洋の法人とおなじつもりなのだろうか。西洋の法人も、それを構成する個人の寿命を超えて存続するという性質は持っているが、どこまでも合理主義に基く人工物で、個人がその永続を願って自殺する「いえ」や皇国とはちがうと思う。いづれにしても「いえ」と企業の混同に注意して欲しいのである。

最後に、誤植が多すぎる。

伊藤規矩治（大学文学部教授）